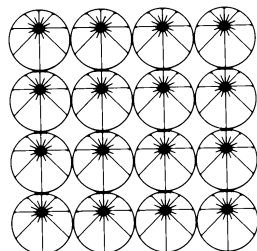


巻頭言



「アンリツテクニカル」再刊にあたり

代表取締役社長

戸田 博道



しばらく発行が途絶えていた「アンリツテクニカル」が復活することになったのは大変にうれしいことです。アンリツは、昨年創業 110 周年を迎え、それを記念して独自の展示会を行いました。ここに来ていただいたお客様方からも、「すばらしい技術の歴史を持った会社だと、認識を改めた。」というようなコメントを多数いただきました。この長い歴史の中で、アンリツの技術者、研究者とお客様、外部の有識者との技術情報交換の場として、この技術報告書が果たしてきた役割は小さくなかったと思います。これからも、技術者、研究者が自分の仕事を記録し、外部の方々にも見ていただける媒体として活用されることを大いに期待します。

私が計測器の開発エンジニアをやっていた数十年前には、ひとつのプロジェクトはほぼ 2 年程度で一区切りとなり、次の製品開発の構想をする間に、終わったプロジェクトのまとめとしてテクニカルに投稿するというのが多くのケースでした。このまとめと次の開発構想作業のための時間はエンジニアとしてのレベルを高めていくために非常に役に立ったと思います。

しかし、最近の計測器の製品開発は、顧客とのパートナーシップにより、測定対象となる顧客の商品開発と同時進行で行われることが多く、スケジュールに自由度が少なくなっています。出来上がった製品も次々とソフトウェアによるバージョンアップが行われていくことが多く、最終

形態を見極めにくいこともあるようです。また、機能が複雑かつ高度化して一人のエンジニアではプロジェクトの全体が見えにくくなって、全体の中での自分の役割を自覚しにくくなっている面もあるようにも思われます。さらに、グローバルな開発競争がますますスピードを要求し、休み時間を与えてくれなくなっています。結果として、開発エンジニアは常に時間に追われ、繁忙感は強いが、なかなか達成感を持っていないというような不幸な状況に置かれているのではないかと感じています。

こうした状況を少しでも改善することにこのアンリツテクニカルが役に立つのではないかと期待しています。プロジェクトが完了したら、アンリツテクニカルの論文としてまとめて発表するという目標を持つことによって、全体の中での自分の役割や目標をより明確に意識できるのではないかと思います。また、最終的な開発の **Output** を明確に思い描いて、それを常に意識することで、より効率的で迷いのない開発が進められるのではないかと期待もあります。

もっばら、社内のエンジニアのための教育的効果を強調してきましたが、もちろんこれは一般に公開される文献として外部の方々のお役に立てるものでもなくてはなりません。その役割を果たしているかどうか、読者の皆様からのご批評をいただければ幸いです。

